

## 松田緝先生退職記念号に寄せる

重鎮教授として、本学の研究教育に重要な役割を担われた松田緝教授は、大ぜいの教職員に惜しまれながらも、本年3月31日付けをもって退職され、先生の生まれ故郷である札幌市をはなれて、岐阜県瑞浪市へ赴かれることとなった。先生が好んで用いられる雅号『飄雲』そのものの如く、飄飄と……………。

先生は招かれて、1974年4月本学に赴任、今日まで経済学部において、一般経済史、西洋経済史を担当されたのであるが、その間に、経済学部長および本学経済学会長をそれぞれ二度、また推されて学校法人札幌大学の理事を歴任されるなど、先生の深い造詣と豊かな経験にもとずき、本学ならびに学部の研究教育およびその体制の充実発展のため、あるいは本経済学会の体制整備のため、その手腕をいかんなく発揮された。その業績は枚挙にいとまない。しかし、本学会とのかかわりで、先生が会長として成し遂げられた組織充実体制整備については、ここに書きとどめておかねばなるまい。本学会の組織を大学とは独立した研究機関としての形を整えたうえで、更に、会員についても、従来の「教員のみによるもの」から「教員と関係学部の学生全員によるもの」へと次々に発展的に組織替えを断行していったさいに、異常なまでの執念をもって、関係者の説得に当られた先生の真摯な姿が、強く印象にのこっている。本学会の磐石の基礎を築き上げられた先生のご功績は、本学会の会員のすべてが、肝に銘ずべきところであろう。本年3月開催の学会総会が萬場一致をもって、先生に「名誉会員」の称号を献呈し、顕彰することにしたのも「むべなるかな」である。

先生は、学生にたいしては元より、同僚、後輩にたいしても、いわゆる頗る付きの「面倒見のよい先生」であった。全国に散らばった先生の教え子たちが、機会あるごとにお宅を訪ねて、あるいは、同僚、後輩たちが招かれては、徹宵快飲のご馳走に預っているのを見掛けたものである。先生は、囊底をは

たいでも、意に介することなく、これを持って成す、という人であった。しかし、独居の間には、小閑を惜んで、辞書を片手に外国書を読み耽る人であった。とりわけ、1955年の末頃、Götz Freiherr von Pölnitz, *Jakob Fugger*, 1949.に出遭ってからの先生は、「水を得た魚」のごとく、「フガー家」の研究に没頭し、それは、つい先日、本学を去ることになるまで続けられた。門外漢の私が言うのは潜越であるが、おそらく、「フガー家」の研究としては、国内では類例を見ないものではなかっただろうか。30年余におよんだ先生の「畢生の労作」とも言うべきものが本学在任中に終結したのである。

ともあれ、このような大作を仕上げられてきた先生の学問に対する姿勢に接して驚かされるのは、お年よりもはるかに若々しい情熱と興味、それに抜群の記憶力の良さをお持ちになっておられることである。先年、フガー家の跡を訪ねての、二度にわたるヨーロッパ旅行の後にもたれた報告会で、メモ一つなしに、次から次へと地名、人名を並べられ、かの地での様子を生き生きと興味深くお話をされたのには、まったく舌を巻く思いであった。

フガー家の研究という畢生の労作を終えて、先生は、三顧の礼をもって、新しい大学に迎えられ、赴任されるのである。心に期する「なにものか」があつてのことであろう。いままでがそうであったように、おそらく先生は、新しい大学で「大学の生命は研究である」という持論を身をもって示されることであろう。先生は、こういう機会を予見したかのごとく、前もって買い込み、しかもいまなお先生にとっても未披見の書籍十数巻を、篋底に秘して、新たなる学問の道を求めて、新任地へ旅立たれていく。篋底の正体を一日も早く教えて頂きたいと願うものである。先生のご健勝とご研鑽のほどを心よりお祈り申し上げるとともに、今後とも本学会への温いご支援とご交誼を賜らんことをお願いして筆を措く。

1986年3月

札幌大学経済学会会長

馬場元二